

主な田端
文芸芸術家たち



芥川龍之介 書斎

は行



萩原 朔太郎(はぎわら・さくたろう) 明治19年(1886)～昭和17年(1942) 詩人
群馬県出身。大正14年、室生犀星の世話で田端311(現2-4)番地に8か月間居住。犀星の詩「小景異情」に感動し、親交がはじまる。大正5年には犀星と二人で雑誌『感情』を創刊。翌年、第一詩集『月に吠える』を刊行。口語自由詩の実質的な完成をみる。鋭敏な感覚で現代人の心の奥底を描き、詩壇にゆるぎない地歩を築く。



浜田 庄司(はまだ・しょうじ) 明治27年(1894)～昭和53年(1978) 陶芸家
神奈川県出身。昭和3年、田端495(現2-11)番地に転入。大正9年、陶磁器研究のため渡英。帰国後、柳宗悦らと民芸運動を推進。栃木県益子に居を定め、同地の陶土、釉薬(うわぐすり)を基本とし、沖縄をはじめ日本各地の民窯雑器のもつ健康的な美しさを吸収、素朴で重厚な作風を確立。文化勲章受章。人間国宝に認定。

林 古溪(はやし・こけい) 明治8年(1875)～昭和22年(1947) 歌人・国文漢文学者
東京都千代田区出身。明治末頃、田端105(現3-20)番地に居住。旧制松山高校講師、立正大学教授を歴任。『わが母』『松山風竹』『わが歌千首』などの歌集、『万葉集外来文学考』『懐風藻新註』などの研究書を著す。また、叙情曲『浜辺の歌』などの作詞者でもある。

林 きむ子(はやし・きんこ) 明治17(1884)年～昭和42(1967)年 舞踊家
明治34年に実業家・代議士の日向輝武と結婚し、同38年頃から大正4年頃まで田端410(現1-22)番地に居住。「蛇御殿」といわれる広大な屋敷だった。夫が疑獄事件に巻き込まれ失脚し、没した後、作詞家の林柳波と再婚。舞踊家として活躍するようになる。田端でも発行された児童雑誌『金の星』の童謡に舞踊振付けを発表した。大正三美人のひとりに挙げられる。



林 芙美子(はやし・ふみこ) 明治36年(1903)～昭和26年(1951) 小説家
尾道の女学校を卒業し上京した後、さまざまな職業を転々とする中で新劇俳優の田辺若男と知り合い、大正13年4月から3ヶ月間、田端320(現2-10)番地の田辺宅で同棲した。その後、昭和5年26歳で発表した『放浪記』で一躍作家として脚光を浴び、流行作家となった。
※出身地は、山口県下関市、北九州市など諸説あり。

針重 敬喜(はりしげ・けいき) 明治18年(1885)～昭和27年(1952) 編集者・テニス選手
山形県出身。大正元年頃、田端506(現3-24)番地のボプラ倶楽部に居住。昭和元年頃、田端521(現5-5)番地に転居。早稲田大学卒業後、新聞社に勤務。大正元年、押川春浪の武俠世界社に入社、主筆を務める。日本庭球協会理事および顧問、日本体育協会会費など歴任。小杉放庵らのボプラ倶楽部に合流し、中心的役割を果たす。

平木 二六(ひらき・にろく) 明治36年(1903)～昭和59年(1984) 詩人・俳人
東京都中央区出身。大正8年、家業の小間物問屋を継ぐことを嫌い、田端621(現5-12)番地あたりに小牧場を入手して山羊数頭を飼い、伯母たちと一緒に生活を始める。この頃、室生犀星の知遇を得て詩作に入る。大正15年、田端409(現1-23)番地に転居。同年、犀星の序、芥川龍之介の跋を付した詩集『若冠』を上梓。また堀辰雄、中野重治らと雑誌『驢馬』を創刊、第7号まで同人となる。

平田 禿木(ひらた・とくぼく) 明治6年(1873)～昭和18年(1943) 英文学者・随筆家
東京都中央区出身。明治44年、田端500(現2-10)番地に転入。大正3年、田端108(現3-19)番地に転居。明治26年、島崎藤村らと『文学界』を創刊、樋口一葉とも交流する。明治36年、オックスフォード大学に留学。帰国後は、母校東京高等師範学校などの教壇に立った後、著作活動に専念。翻訳家としても多くの作品を残す。



平塚らいてう(ひらつか・らいちょう)
明治19年(1886)～昭和46年(1971) 社会運動家・評論家
東京都千代田区出身。大正7年、田端445(現2-12)番地に転入。明治44年、婦人雑誌『青鞥』を創刊。大正3年、年下の画家・奥村博史と同棲。主に婦人問題評論家として活躍。大正9年、市川房枝らと新婦人協会を結成。昭和5年、無産婦人芸術連盟に参加。国際民主婦人連盟副会長、日本婦人団体連合会名誉会長など歴任。



広瀬 雄(ひろせ・たけし)
明治7年(1874)～昭和39年(1964) 教育者(府立第三中学校校長)
石川県金沢市出身。大正3年、田端523(現5-5)番地に転入。芥川龍之介が府立第三中学校(現両国高校)在学中の5年間を受け持つ。芥川が信頼した恩師のひとり。同じく府立三中の教え子である堀辰雄を隣家の室生犀星に紹介。それが堀の文学界入りのきっかけとなる。

福士 幸次郎(ふくし・こうじろう) 明治22年(1889)～昭和21年(1946) 詩人
青森県出身。大正8年、田端543(現5-7)番地に転入。明治41年、佐藤紅緑の恩恵を受け、その家に寄寓。翌年、黄雨の筆名で作品を発表。その後、人生に絶望し詩作を絶つが、大正元年、再び詩を発表。のちに民俗学研究に専念、全国を行脚する。田端時代、紅緑の長男サトウハチローを預かり指導をする。



二葉亭 四迷(ふたばてい・しめい) 元治元年(1864)～明治42年(1909) 小説家・翻訳家
東京都新宿区出身。坪内逍遙に師事し、明治19年「小説総論」、翌年言文一致体の「浮雲」を発表。東京外国語学校(現東京外国語大学)教授などを経て、大阪朝日新聞社に入社。明治37年9月から約半年、田端475(現5-2)番地に居住。同39年新聞小説『其面影(そのおもかげ)』を執筆。翻訳にツルゲーネフ原作の『あひびき』『めぐりあひ』がある。

※国立国会図書館蔵



堀 辰雄(ほり・たつお) 明治37年(1904)～昭和28年(1953) 小説家
東京都千代田区出身。大正13年、田端142(現3-14)番地の「大盛館」、38(現4-9)番地の「紅葉館」などに下宿。府立第三中学校の恩師である広瀬雄の引き合わせで室生犀星を、犀星の紹介で芥川龍之介を知り、生涯の師とする。大正15年、中野重治、窪川鶴次郎らと雑誌『驢馬』を創刊。中野が左翼化していくなかで常に純粋芸術派の道を歩み、昭和5年芥川との交流を描いた「聖家族」で文壇に認められた。